



TITLE:

腎盂移行上皮癌と腎細胞癌の同側重複腫瘍の1例

AUTHOR(S):

荒木, 富雄; 千種, 一郎; 加藤, 廣海; 斎藤, 薫

CITATION:

荒木, 富雄 ...[et al]. 腎盂移行上皮癌と腎細胞癌の同側重複腫瘍の1例. 泌尿器科紀要 1989, 35(2): 291-293

ISSUE DATE:

1989-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116433>

RIGHT:

腎盂移行上皮癌と腎細胞癌の同側重複腫瘍の1例

中勢総合病院泌尿器科 (部長: 斎藤 薫)

荒木 富雄, 千種 一郎, 加藤 廣海, 斎藤 薫

A CASE OF IPSILATERAL PELVIC TRANSITIONAL CELL CARCINOMA AND RENAL CELL CARCINOMA

Tomio ARAKI, Ichiro CHIGUSA, Hiromi KATOH
and Kaoru SAITOH

From the Department of Urology, Chusei General Hospital

A case of ipsilateral pelvic transitional cell carcinoma and renal cell carcinoma (RCC), in an 82-year-old male is presented. We diagnosed this case as pelvic tumor preoperatively with retrograde pyelography and computed tomography. Operatively renal tumor was found and diagnosed as RCC. We thought it difficult to diagnose as RCC preoperatively. To date, this case is the 13th reported case diagnosed clinically.

(Acta Urol. Jpn. 35: 291-293, 1989)

Key words: Double cancer, Pelvic transitional cell carcinoma, Renal cell carcinoma

緒 言

泌尿器系の重複悪性腫瘍の報告は多く、松島ら¹⁾は631例の統計的観察を行っている。しかし、腎と腎盂尿管の重複悪性腫瘍は少なく、前者らも24例を集計しているにすぎない。われわれは今回、腎盂腫瘍の診断で手術を施行し、摘出腎より腎細胞癌も見い出された、腎盂移行上皮癌、腎細胞癌重複症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: N.A., 81歳, 男性

主訴: 肉眼的血尿

家族歴: 特記事項なし

既往歴: 1964年胃切除術を受けた。患者の話では、早期胃癌であったとのことであるが、詳細は不明であった。

現病歴: 1986年5月頃より肉眼的血尿に気付き、近医を受診し、精査のため当科を紹介された。RP、CTで腎盂腫瘍が疑われたため、7月7日入院となった。

入院時現症: 身長 159 cm, 体重 45 kg, 血圧 170/100 mmHg, 脈拍 80 不整 (心室性不整脈), 両腎は触知しなかった。

入院時検査成績: 一般検査; RBC $401 \times 10^4/\text{mm}^3$, Hb 12.6 g/dl, Ht 37.2%, WBC $6,000/\text{mm}^3$, Plt $23 \times 10^4/\text{mm}^3$, ESR 18/44 mm, 生化学; T.P. 7.2 g/dl, GOT 28 KU, GPT 15 KU, ALP 6.5 KAU, LDH 421 Wrob. U, Na 133 mEq/l, K 4.5 mEq/l, Cl 95 mEq/l, Ca 9.1 mg/dl, P 2.8 mg/dl, BUN 17 mg/dl, Cr 1.4 mg/dl, CEA 1.0 ng/ml, CRP 0 mm, 尿検査: pH 6, 蛋白 (-), 糖 (-), RBC 5~10/hpf, WBC 1~2/hpf, 尿細胞診はすべて陰性 (膀胱尿 6/6, 腎盂尿 1/1) であった。

X線学的検査: DIP で軽度の右水腎症と左腎盂内の陰影欠損を認めた。RP で右腎盂内に辺縁不整な陰影欠損が明瞭であった (Fig. 1)。尿管には異常所見を認めなかった。CT でも左腎盂内に腫瘍像を認めた (Fig. 2)。血管撮影は患者の年齢を考慮し行わなかった。

以上の結果、尿細胞診は陰性ではあるが、左腎盂腫瘍と診断し7月18日腰部斜切開にて左腎全摘術を施行した。術中リンパ節腫大は認めなかった。また患者の年齢と手術侵襲の大きさを考え、膀胱壁を含む尿管全摘は行わなかった。摘出腎は180 g, 腎盂内に有茎性の乳頭状腫瘍を認めた。また腎中央部外縁に径1.5 cmの腫瘍を認め、その剖面は黄白色であった (Fig. 3)。術後CT像を再検討すると、腫瘍の位置は腎実質外縁

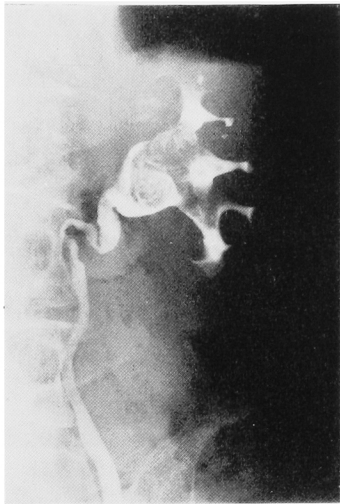


Fig. 1. RP shows left pelvic mass.

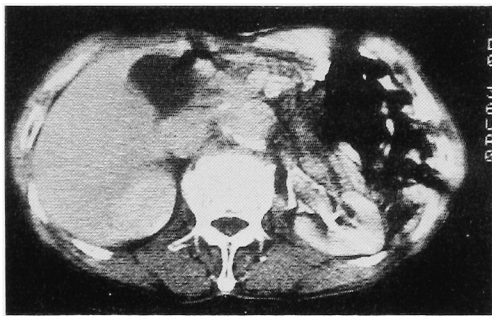


Fig. 2. CT shows left pelvic mass.

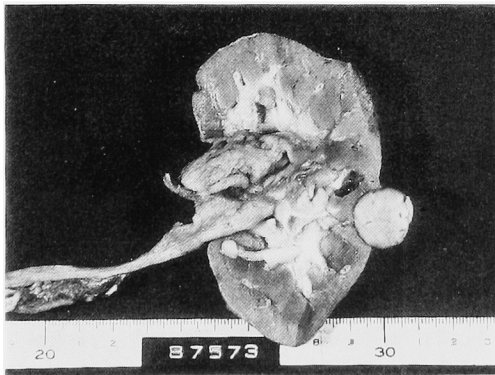


Fig. 3. Gross view of the specimen

の不整像と一致していた (Fig. 4),

病理学的所見: 腎盂腫瘍は、腫瘍細胞が多角形で密な充実性増殖を示し、一部粘膜固有層への浸潤が見られた。細胞異型性は著明ではなく、TCC, grade 2-1, pT1a と診断された (Fig. 5)。腎腫瘍は全周性に繊維性被膜に被われた expansive type の腫瘍で立方状の腫瘍細胞が主として乳頭状増殖を示しており、RCC,

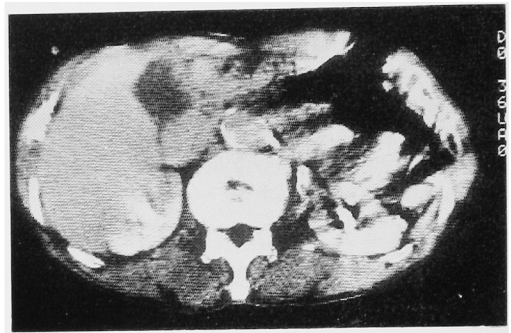


Fig. 4. CT shows irregularity of left renal external margin.

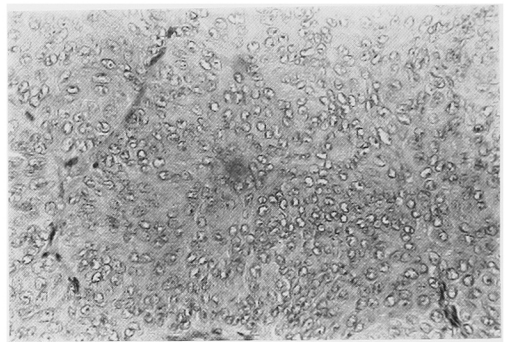


Fig. 5. Microscopic appearance of pelvic tumor

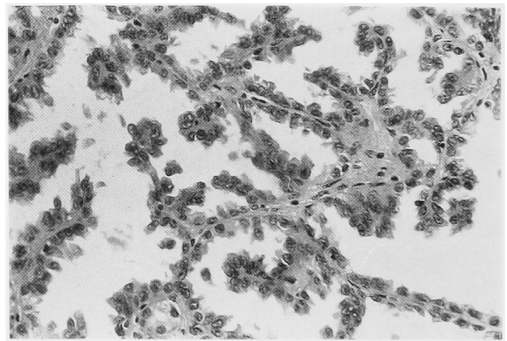


Fig. 6. Microscopic appearance of renal tumor

papillary type, grade 2-1, pT2b と診断された (Fig. 6)。

術後経過は良好で、8月12日退院し、現在外来通院中である。化学療法、放射線療法は行っていない。

考 察

重複悪性腫瘍の発生頻度は年々増加しており、中久木ら¹⁾は、剖検例で全悪性腫瘍中1963~72年では1.96%、1974~78年では4.1%と報告している。この増加の原因としては、1) 外科的侵襲、化学療法、放射線

療法などによる生体免疫機能の低下と後二者による発癌。2) 癌患者の生存率上昇により, 他の癌発生確率の上昇。3) 寿命延長により, 癌全体の発生確率の上昇。4) 診断技術の進歩, 剖検の普及による微少癌の発見。5) 発癌因子に対する暴露頻度の増加。などが挙げられている。しかし, 三重複以上の高次重複悪性腫瘍は稀で, 総重複悪性腫瘍に占める割合は5%前後とされている。自験例は三重複の可能性があるが, 胃癌については患者の言葉以外には根拠がなく証明することはできなかった。

尿路系重複悪性腫瘍の報告も多く, 松島ら¹⁾は, 631例の統計的観察を行っている。二重複悪性腫瘍は586例で, うち118例が泌尿器系領域内のもので, 組合せは, 膀胱と前立腺36例, 腎と膀胱31例, 腎と腎盂尿管23例の順である。前田ら²⁾は, 腎と腎盂尿管の重複腫瘍24例について報告しているが, 同側発生例は19例で, うち12例のみが臨床的に診断されている。私達が検索しえたかぎりでは, その後の報告はなく, 本例は13例めの臨床例と思われる。術前重複腫瘍と診断された例は2例のみで, 腎盂尿管腫瘍と診断されたもの7例, 腎腫瘍と診断されたもの2例であった。重複腫瘍と診断された東ら⁴⁾の報告例は腎盂全体の陰影欠損像があり血管造影で2cmの腫瘍がみつかったものであり, 宮崎ら⁵⁾の報告例は尿管口より腫瘍の突出を認めIVPでも造影不能であり, 血管造影にて3cmの腎腫瘍も見い出されたものである。本例も術前腎盂腫瘍としか診断できなかった。術後CT像の再検討では, 腎腫瘍部に一致して辺縁不整が認められたが, この所

見のみで腎腫瘍を疑うことは困難であると思われた。手術法としては, 対側発生の場合と異なり, 問題となることはない。また本例では, 術前腎盂腫瘍と診断したにもかかわらず, 膀胱壁を含む尿管全摘を行わなかったが, 患者の年齢を考慮すると妥当であったと考える。

結 語

81歳の男性に同側同時発生した腎盂, 腎重複腫瘍の1例を報告した。

文 献

- 1) 松島正浩, 柳下次雄, 深沢 潔, 田島政晴, 三浦一陽, 川原昌巳, 沢村良勝, 宮前加奈美, 定藤弘: 職業性と自然発生膀胱癌を第1癌とする重複癌, 及び泌尿器系重複癌について. 日泌尿会誌 **75**: 1306-1318 4 1984
- 2) 中久木和也, 加藤雅典, 長野 正: 年齢階層別にみた重複癌の統計的考察. 三重医学, **28**: 46-53, 1984
- 3) 前川 修, 本多正人, 亀岡 博, 三好 進, 岩尾典夫, 水谷修太郎, 秋元 晋, 角谷秀典: 同時発生をみた右腎腺癌, 左尿管移行上皮癌の1例. 泌尿紀要 **32**: 1084-1040, 1986
- 5) 東 四雄, 水尾敏之, 齊藤 博: 同一腎に発生した腎細胞癌と腎盂癌の1例. 日泌尿会誌 **66**: 120, 1975
- 5) 宮崎良春, 山口秋人, 角田和之, 南里和成, 原孝彦, 原 三信: 腎と尿管に発生した重複癌の1例. 西日泌尿 **41**: 361-355, 1979

(1988年2月22日受付)